

圓測撰解深密經疏の西藏譯に就て

稻葉正就

一、緒言

解深密經疏は、申すまでもなく玄奘三藏譯解深密經に對してその門下の俊才西明寺圓測法師の撰せる註疏であつて、唐代の本經註疏中、現存せる唯一のものであり、その内容は本經研究者にとつて最高價值有るものと言ふことが出來よう。然るに唯識法相の宗は慈恩系唯識を正統派として圓測のそれを異轍とみなし、輕視して殆んど顧みず、爲にその註疏は早くより既に我が國に將來されてゐたにもかゝらずそれが上梓せられたのは、明治時代に續藏に收められたのを以て嚆矢とする。而も全一〇卷中最後の一卷は遂に失はれてこれを得るに由なき状態である。慈恩宗に於ける唯識法相の宗義が如何やうであつたにしても、唯識說研究の歴史的な現段階に於ては、從

來餘りにも顧られなかつたこの圓測の註疏に對して、新たな考慮が要請せられてゐるのではないであらうか。

さて佛教研究の現段階に於て西藏大藏經の有する役割については既に議論の餘地もないのであるが、いま我々が西藏大藏經を涉獵する時、その中に異轍として排斥せられた本疏が、いみじくも翻譯せられ完全に残つてゐるのを發見するのである。

本疏を繙いて以來、私は圓測唯識に關する幾多の問題が注意さるべきことを見出して居るのであるが、それは他の機會に譲り、それへの前提としてこゝでは、主として本疏の西藏譯が本疏研究の爲の重要資料として如何なる使命を有してゐるかに就き若干の記述を與へることとする。

二、漢文諸本と西藏譯

先づ本疏の漢文諸本の出版せられたものとしては左の二種である。

己 續 藏(第三四套・第三五套中)

九卷(第十卷缺)

支那版單行本(民國十一年金陵刻經處)

三四卷(以下無)

今この二本による外、大谷大學圖書館所藏の安永五丙申になされた寫本九卷(高野山如意輪院藏本を寫したとの奥書あり)を參考とする。

次に本疏の西藏譯に就て述べれば、大谷大學圖書館所藏の北京版大藏經に於ては丹殊爾第三九函・第四〇函・第四一函の前半中に契經解と題して收められてゐる。又同館所藏のナルタン版中にはロ・函・チ・函・フ・函の前半中に收められてゐる。デルゲ版に於ては東北帝大藏版西藏大藏經總目錄中の No. 4016 であり、即ち通帙第二二〇・第二二一・第二二二の前半に相當する。三版とも翻譯者はゴエの法成 (ngos chos-grub) と出してゐる。即

ち彼は漢藏兩語に精通した西藏僧であつて、四卷楞伽の重譯をはじめ多くの經論を譯著した人である。本疏も彼によつて翻譯されたといふことは疑がないであらう。

この西藏譯は合計が、北京版にて八五六葉、デルゲ版にて七三八葉、ナルタン版にて八二二葉の大部より成り、ともに第一章より第七章に分けられてゐる。今各品を基準として諸本を配當すれば次頁の表の如くである。

次表の如く示し得るのであるが、漢文諸本の卷數の分け方と西藏譯の章の分け方が夫々異つてゐる。興福寺永超の撰せる東域傳燈目錄卷上に一〇卷として本疏の名が出されてゐるが如く、圓測は一〇卷として撰述したのであり、續藏及寫本の分け方がそれであることは明瞭である。この分け方は大體各品の切れ目を基準として分け、勝義諦相品無自性相品の如き長いものは一部分を次の巻に入れてゐる。西藏譯はこの分け方を踏襲して更に各品の終りは必ず切りその上更に細かく分けて七五章としたものである。支那版はその何れをも參酌せず品の切れ目では必ず切つてゐるがその他は適宜出版の都合上切つて三四卷としたものであらう。

西 藏 譯 語 版

北京版

章 品 名

デルゲ版

チルタソ版

第三九函 通帳第二二〇

1 b1 1 b1 ti 函 1

122 b4 104 a4 110 b4 10

248 a2 211 a1 230 a4 19

236 b1 246 a1 267 b1 22

314 b8 272 a4 295 a4 24

—336 a8 —201 a7 —310 a5 —25

第四〇函 通帳第二二一

1 b1 1 b1 thi 函 26

96 b8 85 a5 92 b8 35

267 a4 242 b1 282 b2 52

—322 a8 —272 a7 —317 a4 —54

第四一函 通帳第二二二

1 b1 1 b1 di 函 55

109 a1 95 a7 100 b6 66

153 a7 110 b1 116 a6 68

—198 a5 —175 a7 —188 a2 —75

序 品 第 一 卷一—五

勝義諦相品第二 卷六—〇 卷二・三

心意識相品第三 卷一—二 卷三

一切法相品第四 卷一—三 卷四

無自性相品第五 卷一—四 卷四—

分別瑜伽品第六 卷一—二六 卷六・七

地波羅蜜多品第七 卷二—七 卷八—

如來成所作事品第八 卷三四 卷九

……………(無)……………卷一〇(缺)

註

① Cordier, III, P. 371 参照。

② 法成に關しては矢吹博士鳴沙餘韻解説第一部一三八頁、同
 第二部河口教授の論文四四〇頁附近参照。石濱氏「法成に
 關して」参照(支那學第三卷第五號)楞伽經と法成に關し
 は鈴木博士 Studies in the Lankavatara Sutra Pp.
 12-15、大谷勘同目錄二七七一—二七九頁参照。法成は西藏
 より逃げて一時甘州沙州地方に來て譯講を事とした如くで
 あり、彼の譯者が幾多熾煌に發見されたが、それと同時に
 注意を惹くのは曇曠の著書が多く發見されたことであつ
 て、曇曠は圓測派に屬する唐の學僧で、支那より熾煌に入
 つた人の如くである。若しこれ事實であつたとすれば、圓
 測撰述の本疏が曇曠又はその一派によつて熾煌に傳へられ
 て、法成によつて西藏譯されたといふことが考へ得られる
 譯である。尙ほその他興味ある問題が存する様であるが、
 今はこれ以上言及しない。

③ 大日本佛教全書第一冊一〇七頁。

三、西藏譯の價值

この西藏譯解深密經疏が本疏研究上に有する價值に就
 て述べれば、大體次の諸項を擧げることが出来る。

第一に西藏譯はそれが完本であること。

すなはち支那撰述中解深密經の註釋書として唯一にし
 て最高價值ある本疏は、惜しいことには一〇卷中最後の
 一卷即ち如來成所作事品の註釋の大部分が散逸してしま
 つて未だ發見されない。安永寫本及續藏の第九卷の最後
 に「經文未竟。宜有次疏。惜哉。此本罄于第九卷。後
 學須尋而全備焉。」と惜んでゐる。然るに今や我々には
 西藏譯が提供せられてゐる。即ちその中の第六八章より
 最後の第七章までに亘る間(北京版第四一函 125a¹—
 198a³、デルゲ版第二二〇帙 110b¹—175a⁷、ナルタン版
 di 函 116a¹—188a³)がまさしくその散逸せる個所に相
 當するものである。漢文本文の失はれたことは惜むべき
 ことであるが、しかしこゝに我々が西藏譯を得て圓測註
 釋の全貌を知り得ることは、實に喜ばしき極みである。
 この一事を以てしても西藏譯の價值は貴く輝かしきもの
 であるといへよう。

次に短かい文章ではあるが、漢文本文に一個所散逸せ
 る個所がある。それは地波羅蜜多品第七の最初の品題に
 對する疏の文が失はれて居て、安永寫本第八卷の最初に

「此品疏有闕文。……應有三門分別。而今闕前二門。可憾哉。」と書き添へてゐる個所である。これを西藏譯に求めるに第五章の最初の文(北京版第四〇函 287a¹—288b¹、ベルゲ版第1111一帙 292b¹—243b¹、ナルタン版 thi 函 282b²—284a²)がそれに當るのである。

前者は大部であり且つ相當研究を要し一朝一夕の業ではなく、後の機會に譲るとして、今短い後者を翻譯して、圓測の文は多分斯くあつたであらうと漢文に推定還元して、最後に附加した次第である。

第二に解讀上の參考となること。

慈恩系統である従來の唯識宗學には異解とせられた爲に、圓測の本疏は殆んど顧みられなかつた。隨つて未だ訓點の施されたものを見ず、皆白文のまま放置せられてゐて、これが解讀上相當なる困難に遭遇するのである。

然るに西藏譯を參考することにより我々はこの困難を殆んど除くことが出来る。元來西藏語はその文章構造が國語とよく似た點があつて、例へば漢文に於て名詞に讀むべきか動詞に讀むべきかさへ迷ふ場合に於ても、西藏譯にて動詞に讀む時は後へ動詞の形として譯されてあるの

を見て動詞に讀むべきを知る。又特に八轉聲なる格的助辭は國語のテニヲハに相當すると考へられ、巧みに格的助辭を以て西藏語に翻譯せられてゐることは、國語のテニヲハなる助辭に容易に換へ得べき状態にされたものと云ふべく、即ち西藏譯にされてゐることは、もはや漢文を半ば國譯にされた如き結果となれるものといふことが出来るのである。それ故に西藏譯によつて容易に訓點を施すことが出来、たゞしく解讀する上に於ける重要な參考となるのである。^①

第三に諸本の出沒異同の校正資料となる。

漢文諸本を比較するに、字句は大略一致して大なる出沒異同はないが、二・三字程度の出沒異同は殆んどどの頁にも數箇所も發見せられるのである。これ等は些細なこととも云へようがたゞしく本疏を讀解せんとするに於ては、どうしても經なければならぬ手續である。その場合何れの字句が正しいのであるか、或はこの字句は入れるべきか除くべきかといふが如きことを決定する上に於て、西藏譯は、またなき參考資料となる。一例を示せば

(1) 勝義諦相品の下の釋文中に、瑜伽論の「若不^レ起^ス言^ハ說^ハ。則不能^ニ爲^ス他^ノ。說一切法^ヲ。離言自性^ヲ。他亦不^レ聞^ク。……」の文を引用してゐるが、その中の「離言自性。他亦不聞」を安永寫本及び續藏^④ともに「離言自性。亦不聞」とあるが西藏譯には、*gal-te bñod-ta ma-bskyed-na shan-dag-la chos thams-cad bñod-ta med-pahi ño-bo-ñid ston-par yan mi hgyur-la gshan-dag kyan thos-par mi hgyur-ro* ^⑤とあつて、西藏譯せられた時の原本は瑜伽論本文の如くあつたことを知るのであり、寫本及續藏は誤り傳へたものであることを示すものである。

(2) 又勝義諦相品の下の釋に、雜集論の文を引用して漢文諸本ともに「應^ト頌^ス者^ト。即諸經^中。或以頌^ヲ重頌^ス。」とあるが、雜集論の本文を見ると「……或中^ハ。或後^ハ。以頌^ヲ……」とある。圓測が撰述した時、或はこの「中或後」の三字を省略して引用したのかも知れないとも疑はれるが、西藏譯を見るに *dbus dan tha-mar* ^⑥とある句が入つてゐるのであつて、まさしく西藏譯のなされた漢本には略してゐなかつたことを知り、自らこの疑

は解消して、現在の漢文諸本にこの句を挿入すべきであることが明瞭となるのである。

斯の如き些細な出沒異同と雖も、一字一句吟味してゆるがせにしないことによつてこそはじめてたゞしき讀解を期し得られるのである。ましてどの頁にも數個も發見せられるが如き多數に上る以上、當然この手續を經なければならぬのであつて、西藏譯がまたなき參考資料となるのである。

註

① 河口教授「漢譯と西藏譯との難易の對照」參照。(鳴沙餘韻解説・第二部・四五八頁)

② 大正三〇・四八九下

③ 卷二・四六左

④ 卷二・三三七右

⑤ 北京版第三九函 171b. デルゲ版第二二〇帙 145a¹

⑥ 安永寫本卷二・二五左・續藏卷二・三三一右 支那版卷七、一左

⑦ 大正三一・七四三下

⑧ 北京版第三九函 149a. デルゲ版第二二〇帙 127a¹

四、西藏譯中の大なる出沒個所

安永寫本、續藏、支那版ともに屢々多少の字句の出沒異同はあるが、殆んど大差なく前述せし程度のもので、大なる問題を有する事項は見出されない。然るに西藏譯に於て、漢文諸本と比較するに、我々は相當多量の出沒を發見するのである。今漢文諸本と西藏譯との間の出沒に就て見るに、大體次の如く分類して考へることが出来るであらう。

第一に西藏譯に無い個所に就て。

(1) 繁を恐れて省略したと思はれるもの。

本疏は圓測が蘊蓄を傾倒し、公平なる立場に於ける判を下さんとして、驚くべき程多數の經論を引用し、從來の異説を悉く網羅することによつて、或は解釋し或は取捨選擇し或はその聖言量としてゐるのがその特長の一である。その結果二三重に經論を引用して、やゝ繁雜の感なしとしない點がある。その場合西藏譯には或る程度に引用を止め、他は繁を恐れて翻譯を省略してゐるとみるべき個所が屢々ある。

(2) 語の語原的解釋の個所及び舊譯と比較せる個所の省略。

語の語原的解釋即ち梵語ではどういふとか、或はそれの新譯たる玄奘譯に對して舊譯たる流支及び眞諦譯はどうかであるとかいふが如きことは、西藏譯としては西藏譯語に於て原文の意味が與へられればそれ以上の必要はないのであるから、斯の如き個所は西藏譯には省略してゐる場合が多い。例へば

所言頌者。深密・解節皆說偈言。舊來諸師。自有兩

釋。一云。偈者梵音伽陀。此云重頌。而翻譯者。爲

存略故。或音訛故。但言偈也。一云。偈者此即漢

語。竭也盡也。四句成頌。擣義同盡。故言偈也。

不爾。梵音正是伽陀。即應言伽。不應名偈。雖有

兩釋。前說爲正。西方諸國。語音不同。中印度國。

名爲伽陀。餘處名伽他。乃至于闐國。名爲偈他。

譯家略故。但言偈也。

即ち經の中の頌の解釋をして、梵語は伽陀であり、吾人の所謂偈とは于闐國の偈他を略したものであると述べてゐるのであつて、これ圓測が梵語のみならず西域地方の胡語に對する知識が深く六ヶ國語に通じてゐたといふ説の證明であるといはれる解釋ではあるが、西藏譯を讀む

西藏人には頌が *tsings-su boad-pa* と譯されてありさへすればそれでよいのであつて、支那に於ける翻譯の意味がどうであらうがそんなことは必要ではないわけである。それ故に斯の様な個所は翻譯せず省略してゐる。

又心意識相品最後の彼の有名な「阿陀那識甚深細……」の偈の釋の中にもその流支譯及び眞諦譯を擧げてゐるが、その西藏譯中にはそれが省略されてゐる。

このことは梵文より翻譯せられたものにも語原的解釋の個所の西藏譯の省略を見るのと同じ意趣であると考へられる。

(3) 引用經論の卷數の省略

諸經論を引用して例へば「瑜伽論第三十六云……」とある時、西藏譯は *bsan-boos rnal-tibyor spyod-pah-sa-las*……と翻譯され、卷數の第三十六といふのは殆んど全部省略されてゐる。思ふにこれは、此の漢譯瑜伽論の卷數を翻譯しても、西藏にある西藏譯瑜伽論は梵語よりの翻譯であつて漢譯よりの翻譯ではなく、その卷數も文章も異つてゐるわけであるから、卷數を翻譯しても何の益もないことである。故に引用經論の卷數は省略するこ

とゞしたのであらう。

(4) 其の他

大體西藏譯に見出されない個所は以上の中の何れかに當るものが多いのであるが、その外に考へられるのは餘り意味のない價値の少い個所の翻譯を省略してゐる。處に割註があるが、その中でも價値の少い割註が省略されてゐる様である。或は現在の漢文諸本の中には割註の中などに後人の附加とも疑ひ得る個所もないではないし、隨つて西藏譯になされた原本にはなかつた個所もあるであらうが、その點に關しては明確なる證據を有しないのでこゝに明言し難い。

第二に漢文諸本に無い個所に就て。

漢文諸本に無い個所の最も大なるものは散逸した個所であるが、それに就ては既に前述した如くであるから、こゝには散逸した個所以外に關して述べることにする。大體に於て西藏譯に無くて漢文諸本に存する方が多く、西藏譯にのみ存する個所は殆んど無いが、第一卷の中には比較的長い個所が相當數發見せられるのであり今その一例を示すと次の如くである。

説法差別を三身に約して釋する個所に於て、先づ薩婆多宗及び經部宗の二身を説き、次に大乘の三身を説いて三身の説不説^①就て述べてゐる。西藏譯はその次に更に四身の説不説を説いてゐる。その西藏譯によつて原文を推定漢文に還元して出せば、

依四身者。有其五句。一。一説三不説。謂法身者。內證行境界故。亦非自説。無所爲故。亦非餘身。非眞説^②故。二。二説(13a)三不説。謂復受用。及變化身。非餘二身。無言説故。無所爲故。三。三説一不説。眞如法身。離言説相故。四。四皆説法。如楞伽。説。「三身皆説法」。變化身。開爲二故。五。四皆不説。無言説故。無所爲故。非眞説^③故。如是雖異句多。親光等説受用身及變化身説法。如實義也。

即ち西藏譯になされた原本には斯の如き文があつたのであらうか。然るに四身に就て漢文諸本には一言も出てゐない。それではこの個所は果して圓測が撰述したものであるか或は後人の書添へが混入したものであるか或は翻譯者がこれを加へて翻譯したものであるかと

いふ疑問が生ずるのであるが、我々は現在その何れかに決すべき文獻を有しないので如何とも云ひ難い。然し乍ら圓測はこの註疏を撰するのに、あらゆる説を網羅する仕方を以てしてをりをるから、こゝに四身を出したと考へられるのである。然し乍らまた翻譯者法成は四卷楞伽を翻譯してゐる人であるから、四卷楞伽の四身を加へて翻譯したとも考へられるのである。是の如き文は果して圓測の書いたものかどうか問題ではあるが、新しい貴重な材料であり、第一卷は興味ある問題が提供せられてゐるのであるが、その研究は他の機に譲る。

註

- ①續藏卷二・三三一右 支那版卷七・一左
- ②羽溪博士「唯識宗の異派」参照(宗學研究第一卷第一號八頁)
- ③續藏卷一・二九五右 支那版卷一・一三右
- ④「……自受用身。無所爲故。變化身等。非眞説故。」(續藏卷一・二九五右。支那卷一・一三左)の次に西藏譯には四身の説が入るのである。
- ⑤北京版第三九函 12b7-13a4、ギルゲ版第三二〇帙 II a7-11b5、アルタン版 II 函 12b6-13a4

五、西藏譯に對する注意事項

本疏研究上もはや西藏譯を無視してはなし得られないのは勿論である。我々はこの西藏譯を重要資料とせねばならない。然し乍ら無條件的にそれに信賴すべきものではなく、矢張り一方の重要な資料とみなすべきである。そこで注意を要する事項を考へてみるに、大體次の如き事項が考へられるであらう。

第一に西藏譯中の誤り

上述の如く非常に價値ある西藏譯も、稀には誤りとしなければならぬ點がある。今一例を擧げて示すと、

勝義諦相品の釋の中に犍子部の五法藏を出してゐる。

この五法藏とは漢文諸本には皆、三世と無爲と不可說法藏との五としてゐるが、この個所の西藏譯には *dus-gsum dan hdus-na-dyas dan brijod-du med-pa dan brijod-du med-pahi chos dan brijod-du med-pahi chos kyi sde-snod-to* とあり、即ち三世と無爲と不可説と不可説法と不可説法藏とである。斯の如く五法藏の五つの名目が異つてゐるのであるが、俱舍論

卷二九に「彼所許、三世無爲、及不可説五種。」とあり、又成實論卷三に「謂五法藏。過去未來。現在無爲、及不可説法。」とあつて、明らかに西藏譯の五名目の誤りであることを知り得るのである。

第二に經の本文等の翻譯

本疏は玄奘譯解深密經に對する註釋書であるから、玄奘譯の經の本文を出して次にそれに對する釋が述べられてゐる。西藏譯に於ても同様の次第で譯されてゐるが、こゝに奇異に感ずることは、西藏譯に於て、釋の部分は忠實に翻譯せられてゐるにもかゝらず本文の部分は少し違ふ場合が多い。玄奘譯の經に對する註釋書である以上、玄奘譯を重譯すべきが當然であるのに、必ずしもその様にしてはゐない。乃ち梵文より西藏語に翻譯せられた解深密經本文が玄奘譯と大差なき時は梵文よりの翻譯を出し、文言に相當差ある時は梵文よりの翻譯では釋の部分の意味がわからなくなるから玄奘譯を重譯して出してゐる。この様に成るべく梵文より翻譯せられたものを出そうとするのは如何なる理由によるのであらうか。思ふに西藏への文化の輸入は文成公主の降嫁の頃より主と

して支那に仰いでゐたのではあるが、佛教に關しては直接印度より仰ぐ方が正しいとせられて盛んに印度より輸入したのである。この意趣がこの經の本文を出すに際しても顯れて、釋の部分に差支へない限りに於て梵文よりの翻譯を出す方がより正しいと考へたのであらう。

又釋の中にも甚だ稀ではあるが重譯せずに梵文よりの翻譯を出してゐる個所がある。例へば、屢々成唯識論を引用してゐるが、その中の三十頌の偈は玄奘譯三十頌を重譯せずに梵文より翻譯せられた西藏譯三十頌の偈を出してゐる。^④これ即ち三十頌の偈は成唯識論の本文であつて、矢張り本文は梵文よりの翻譯を出す方が正しいとの意趣であり、この經の本文の翻譯の場合と同一意趣とみられ得る。又三十頌の如き重要なものの翻譯には、重譯した西藏譯を出すよりは直接梵文よりの翻譯を擧げる方がより正しいことであり適切なることであるとしてなされたものと考へることが出来るであらう。

このことは又この疏の西藏譯の卷頭にその題目を出す
 ⑤ *rgya-gar skad-du a'ya-sam-dhi-gambhira-ni-mo-*
ca-na-sū-tra-tika として、恰も印度撰述の本に對して普通

行つてゐると同じ體裁を持たしめてゐるが如きことになつたのであつて、佛教經典に關しては直接印度の佛教を重要視せんとする西藏佛教者の意趣がそこに如實に見られるのである。

西藏佛教の歴史性は西藏譯に於て與へられた正しくの傳統の現流に於て得らるゝであらう。併しその傳統は、その傳統の根源的形態として常に印度の佛教を反省するものでなくてはならない。かうした西藏佛教者の態度は、佛教學の現段階に於ても考慮せらるべき問題となるのではないであらうか。

註

- ① 續藏卷二・三三六左 支那版卷七・二一右 安永寫本卷二・四三左
- ② 北京版第三九函 133b・デルゲ版第二二〇帙 143a
- ③ 大正二九・一五三中
- ④ 大正三二・二六〇下
- ⑤ 支那版のみ經の本文の位置を異にしてゐるが、他の漢文諸本及び西藏譯は全く一致せるよりみて、圓測撰述本は斯くあつたことは明瞭にて、支那版は讀む上に都合よく様に適宜位置を換えたものであらう。

⑥一例を示せば勝義諦相品の釋に成唯識論第九卷を引用してその中に「現前立少物……」の偈を出してゐるが、この西藏譯は明かに梵文より西藏譯せられた三十頌中の第二七偈である。

支那版卷八・一八左・安永寫本卷二・六九左

北京版第三九函 157 a⁵・デルゲ版第二二〇帙 166 b⁴

同じく第八卷を引用してその中に「依他起自性……」の偈を出してゐる。即ち梵文よりの西藏譯三十頌中の第二一・二二偈である。

支那版卷九・四左・安永寫本卷二・八〇右

北京版第三九函 208 a⁵・デルゲ版第二二〇帙 176 a³

⑦ *nirnocana* は西藏譯三版とも *nimoca* とあり。

六、漢文より西藏語への翻譯

以上主として本疏研究上參考資料としての西藏譯の重要な諸點に關して述べたのである。最後に蛇足ではあるが本疏の西藏譯に於ける漢文より西藏語への翻譯に關して二・三述べてみよう。

元來西藏語はその言語の性質上極めて文字通りに翻譯し得るものであることは、梵語よりの翻譯の場合と大體

同一のことが漢文よりの翻譯の場合にも云ひ得るのである。即ち能く梵語原典を透寫し得た如く、ほゞ同じ様に漢文原典をも透寫し得たのである。

又譯語に就ても一貫した統一性を有してをり、漢文の一の文章や字句は常に一定して翻譯されてゐる。例へば「即」⁴とふ語は常に *hd-i-ni* 或は *ni* と譯し、同意味の「謂」といふ語は常に *hd-i-ta-se* 或は *hd-i-tar* と譯し、而も之は互に混用されることはない。

此等のことは現存する漢文諸本の出沒異同や錯誤を原正なる姿にまで取りもどす爲の重大なる資料となる原因であり、散逸して現存しない個所の原語を推定し原意を把握することが出来る素因である。

もとより漢文は進化せる言語であつて、一語と雖も豊富な文化内容を背景とし多様な思想を包藏してゐる。一語が二つもの意味を有してゐる場合が多い。これに反して西藏語は諸概念に染まない原始的な單純な言語である。それ故に多くの意味を包藏してゐる漢語を西藏譯する場合には、その語の場合のみの意味の西藏語を以て譯さざるを得ない。例へば「念」といふ語は利那

の意の時は skad-cig-ma と譯し、念ずる意の時は sems-pa 或は rjes-su-sems-pa と譯される。このことよりして漢語の六ヶ敷い語も西藏譯によつて容易に簡單明瞭に理解し得るのである。

又漢文の豊富な語彙は自ら文章構成の巧みなる用法となり、たとへ同一意味の場合でも同一語の重複により文章が拙劣になることを恐れて、同義異語で種々置き換へられるのが常である。例へば「初有^ニ四品^一。明^ニ所觀境^一。次有^ニ二品^一。辨^ニ能觀行^一。後有^ニ一品^一。顯^ニ所得果^一。」といふ經の七品を三段に分類する文章の中、「明^ス」「辨^ス」「顯^ス」といふ語は文章を巧妙ならしめる爲の同義異語であるが、西藏譯は總て一様に bstan-pa と譯してゐる。その外「說^ス」「釋^ス」「出^ス」「陳^ス」「申^ス」「標^ス」「叙^ス」等の語も皆同じく一様に ston-pa (bstan-pa) と譯さざるを得ないのである。このことは散逸個所に於ける原語を推定還元する場合、我々は果して原語は何れの語であらうかと迷はざるを得なくなるのである。

又次に兩語の言語の形態上用法上の相違は、漢文の文章の構成そのまゝの形を以て西藏語に翻譯されることが

出來ないことは勿論である。例へば漢文の「名爲^{ケル}地^ト」と云ふ方も西藏語では sa shes-byāho と云ふ素朴な譯しか出來ない。又時には反對に「如^シ瑜伽論^ニ云^フ……」とある時は bstan-bcos rnal-ihyor-spyod-pahi sa-las ji-skad-du……shes byad-pa ia-duho と云ふ巧みな文章に譯される。故に西藏譯より原語を推定せんとするには、先づ斯の如き雙方の云ひ方の多くを會得しなければならぬ。

最後に梵語より翻譯された西藏譯文の文章と比較して考へるに、勿論文體が各々趣を異にしてゐるのは當然のことであるが、今著しい例を考へれば漢文には關係代名詞の用法は全然ない。隨つて漢文よりの西藏譯中には gan……de……(yad……tad……)の用法の如きは見られない。然し乍ら原始的な貧弱な言語であつた西藏語が、進化せる梵文を翻譯するに當つて大部分その用語を梵語より借りて來て、終には西藏文にして實は西藏文に非ざるが如き趣きを有する迄に至つたのである。この梵語よりの非常なる影響は漢文よりの西藏譯文にも甚だしく顯はれて、漢文よりの翻譯であるにもかゝらば

梵語の色彩濃厚なる云ひ方を以て翻譯されざるを得ないのである。例へば、「若人^{シヤツト}貪^{シヤツ}著^{シヤツ}三有^ニ。誹^{シヤツ}謗^{シヤツ}大乘^ヲ。」

名^ヲ一闡^ト提^ト。』とあるのを譯して、gan-ta-ta srid-pa gsam-

la mñon-par-shen-ciñ theg-pa chen-po-la skur-pa hdebs-

pa gan yin-pa de ni-hdod-eken-pa shes-dya-ste とし、

如く屢々譯されてゐる。このことは梵文よりの場合の如く明瞭には漢文を透寫し得ない結果となつてゐるが、しかし梵語の色彩濃厚なるまゝに却つてその特長を生かして翻譯してゐるとも云ひ得るのである。

以上漢文よりの西藏譯の仕方に關して二・三述べたに過ぎないものであり、更に研究されば種々興味ある問題が出て來るであらう。それは梵文よりの西藏譯の如き價値はないとしても、廣く西藏譯といふ意味からいつても又廣く佛敎學といふ立場からいつても、梵文よりのものに限定せられることなく、別な注意を要すべきものであらう。

註

① 續藏卷二・三三三左・支那版卷六・一左

② 北京版第三九函 123 b²・デルゲ版第二二〇帙 104 b⁶—105a¹

③ 續藏卷二・三三三左・支那版卷七・八右

④ 北京版第三九函 123 b⁶・デルゲ版第二二〇帙 132 b³

七、結 語

以上主として本疏の西藏譯が本疏研究上如何に重要な資料となるものであるかに就て述べたのである。即ち西藏譯あればこそ散逸した個所の内容も知り得るのであり、又正しく本疏を理解するにも貴重なる參考となるのである。勿論西藏譯中に吟味せられねばならない點があり一概に無條件的に信賴すべきものではないが、然しそのことは偉大なる價値よりみれば些細なるものであり、却つてその一面には比較考證のよき參考となり新しい問題が我々の前に提出せられるのである。如上の諸點よりして最早我々は西藏譯を無視して本疏を論ずることは不可能といふべきである。西藏語聖典研究上の一分野として斯の如きものがあることを紹介すると共に、益々その價値の重大なるものであることを再言して擧筆する。

この小論は恩師山口益博士並に諸先輩より種々御示教を賜りまして草することを得ました。茲に誌して厚く御禮申し上げます。

す。デルゲ版との對照は高野山大學圖書館所藏のものによりました。對照するに際して同館の方々及び野澤教授が種々便宜を與へ下さつたことを厚く感謝致します。

解深密經疏卷第八の卷頭の

散逸せる個所の還元漢文

(西藏譯) 北京版第四〇函 287a—288b。デルゲ版通
帙第1111 242b—243b。ナルタン版 111 函 382b—
384a

地波羅蜜多品第七

將釋此品。三門分別。一。釋品名義。二。辨品來
意。三。依文正釋。

釋品名者。梵音步彌。翻名為地。謂極喜地等十一
地。具生等義。故名爲地。然此地義。諸教中。諸
說不同。一者。以一義說地名。如仁王經云。「入
理般若名為住。住生德行名為地。」十住論第一
云。「善根階級。住處名地。」(287b, p.) 無性攝論釋
第七云。「法無我智。分位名地。」瑜伽論云。「攝持涅

槃。故名爲地。」一者。以三義釋地名。(283a, N.)
如本業經云。「佛地者。持百千阿僧祇功德。故名生。
成一切因果。故名地。」成唯識論第九云。「與所修行。
爲勝。依持。令得生長。故名爲地。」爲依持故名
生。能(243a, D)攝持故名長。一者。以三義釋地
名。如佛地論第一云。「地謂所依。所行所攝。即眞
如四智。受用和合。一味等事。是佛所依。所行所攝。
故名佛地。」所依者眞如。所行者四智。具所行故。所
攝者。四智相應。心心所等。一者。以四義釋地名。
如瑜伽論(288a, P.)釋云。「地謂境界。所依所行。
或所攝義。是瑜伽師。所行境界。故名爲地。如龍馬
地。唯此中行。不出外故。或瑜伽師。依此處所。增
長自法。故名爲地。(283b, N.)如稼穡地。或瑜伽師
地。所攝智。依此現行。依此增長。故名爲地。如珍
寶地。或瑜伽師。行在此中。受用自法。故名爲地。
如牛王地。具說如彼。若廣分別。如莊嚴經論。梁
攝論釋。及佛地論等說。可知。所以如是(243b, D.)
說異者。如世界地。具上說諸義。從喻立名。故
說爲地。梵音波羅蜜多。翻爲到彼岸。由施等力。

從_レ生死此岸。到_レ涅槃彼岸。故名_ニ到彼岸。於_ニ此品中。廣說_レ地及波羅蜜多。故言_ニ地波羅蜜多品。辨_ニ來意。就_ニ無等行。上說_ニ二義。(288b, p.)初明_ニ止觀。後明_ニ地度。上來已。釋_ニ止觀_ニ。自下第二。釋_ニ地度_ニ。謂修觀行門。有其_ニ二種。一者。依_ニ止度(284a, N.)起。觀。是總相門。故在先說。二者。依_ニ地起度。是別相門。故在後說。(以下現存)或可_ニ止觀。略_ニ故先說。依_ニ地起度。廣_ニ故後釋。來意已說。今當_ニ釋_ニ文。(依正文釋)……………

註

- ① 西藏譯には「第五十二章解深密經中地波羅蜜多品第七」とあり。今は漢文諸本の前の品の形式による。
- ② 仁王般若波羅蜜經卷上(羅什譯) 大正八・八二七中
- ③ 十住婆沙論卷第一 大正二六・二三上
「地者菩薩善根階級住處」
- ④ 攝大乘論釋卷第七 大正三一・四二三中
- ⑤ 菩薩瓔珞本業經卷下 大正二四・一〇一七下
「佛子・汝先言云何名地・佛子・地名持・持一切百萬阿僧祇功德。亦名生・成一切因果故名地。」

- ⑥ 成唯識論卷第九 大正三一・五一中
- ⑦ 佛地經論卷第一 大正二六・二九一中
- ⑧ 瑜伽師地論譯 大正三〇・八八四下
- ⑨ 分別瑜伽品の疏文の最初即ち品名釋の次に出づ。安永寫本卷六・二左 支那版卷一九・二左
- ⑩ 「文」の一字漢文諸本に無し、西藏譯により加入す。